

遺構図

調査の目的

今回の調査の目的は、昨年同様、石神遺跡の施設群の北側の状況を明らかにすることです。

検出した主な遺構

B期（天武朝の頃）

遺構は堆積の状況から2時期に細分できます。B-1期には大量の木屑の堆積した土坑1と池状遺構があります。池状遺構は、第15次調査で確認しているL字形で池状の溝の続きです。A期の沼を埋め立てた整地土を幅約15m、深さ約40cm掘って造られています。東岸は急勾配で直線的ですが、西岸は緩傾斜で蛇行し、岬状に突出する部分もみられます。第15次調査区ではこの溝の屈曲部にも両岸から突出部があり、水門と考えられています。B-2期には木屑が多く含まれた土坑2と南北溝があります。南北溝は、池状遺構がほとんど埋まった後で、その西岸近くを流れた浅い溝です。大量の木屑とともに木簡やその削屑も出土しています。

C期（藤原宮期）

南北大溝はB期の池状遺構を整地土で埋め立てた後に掘られた南北道路の西側溝で、幅約5m、深さ約80cmの溝です。その西側の一部には石敷1が広が

ります。石敷2は第15次調査区でみつけた井戸周辺の石敷の一部です。

C期以降（奈良時代以降）

東西石群は幅約1.5mの浅い素掘りの溝に多量の石が入っています。暗渠の可能性がります。

出土した主な遺物

金属製品……銅製人形  
 木製品……鋤（一木造り）、下駄、齋串、琴柱、漆器、曲物、栓、匙、独楽、糸巻  
 土器・土製品……土師器、須恵器、埴埴、土馬、円面硯、「物部連」「五十上」と記した墨書土器  
 木簡……多くは荷札木簡で、「三川国」など各地の地名を記したのものや、「己卯年」（天武天皇八年、679）や「壬辰年」（持統天皇六年、692）の年紀のあるものがあります。また、『論語』の一部を記した木簡も出土しています。

まとめ

今回の調査区では、建物群がみられず、第15次調査区から続くB期の池状遺構やC期の南北大溝を検出し、これらがさらに北へ続いていることが明らかになりました。また、出土した多数の遺物は遺構の時期や性格を考える上でも貴重な資料です。

(2003年11月)



石神遺跡の調査

石神遺跡第16次調査現地説明会資料



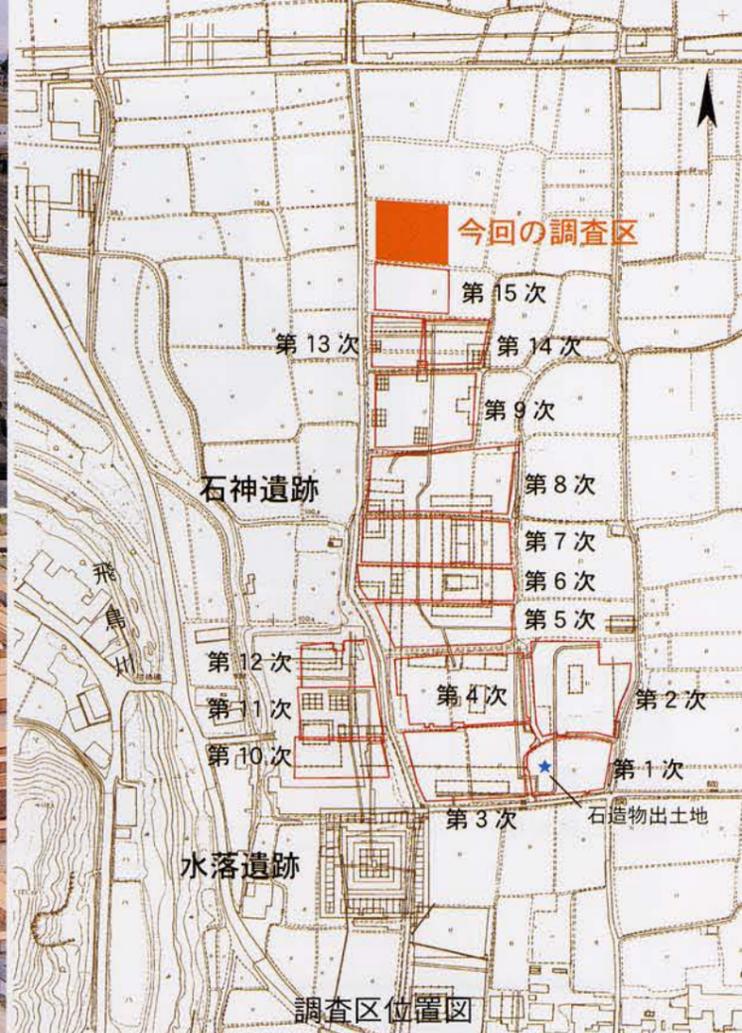
施設群の北限 (北西から 第14次調査)



南北大溝 (東から 第15次調査)



石神遺跡 水落遺跡復元模型 (南西から)  
 斉明朝のすがたを、調査成果に大胆な推測を加えて復元しました。手前(南)が水落遺跡の漏刻台奥(北)が石神遺跡で、西側の広い区画を迎賓館、東側の区画と石敷広場を饗宴の場としました。



調査区位置図



石人像(復元)

須弥山石(復元)



方形石組池 (西から 第6次調査)

### 石神遺跡の概要

百年前に小字石神の水田から噴水施設と考えられる石人像と須弥山石が出土し、1936年の調査では石組溝や石敷が発見されました。その後、この遺跡は石神遺跡と名づけられ、1981年以降の本格的な発掘調査によって7世紀前半から藤原宮期まで大きく3時期の遺構を確認し、施設を造り替えながら利用してきたことが明らかになりました。また、石神遺跡の施設群は、南限を漏刻台の跡である水落遺跡の北側、第3・10次調査で検出した東西堀とし、北限を第13・14次調査で検出した東西石組溝と東西堀として、南北約180mの規模を有することもわかりました。

A期のうち最も整備されたA-3期(斉明朝)は、長大な建物で囲まれた東西二つの長方形区画の内外に、大規模な掘立柱建物群、石敷の井戸、石組溝や方形池がつくられ、区画の北方には倉庫などが設けら

れました。出土土器の中には東北地方産の土師器椀や中国・朝鮮半島産の土器があり、これらの遺構は、蝦夷をはじめとする辺境の民や朝鮮半島からの使節(高句麗、新羅、百済)を迎えて饗宴をした施設と考えられます。

B期(天武朝)にはA期の施設を全面的に取り壊して整地した後、長大な建物や堀が営まれ、様相が一変します。これらは役所的な施設と考えられます。

C期(藤原宮期)には掘立柱堀で囲んだ一辺約70mの役所的な方形区画がつくられ、その東側は両側に側溝のある南北道路になります。

昨年の第15次調査では、施設群の北側でも3時期の遺構を確認しました。A期は調査区全体が沼で、B期には沼を埋める整地をし、L字形で池状の溝を掘っています。C期は南北道路の西側溝や石敷、掘立柱建物が設けられています。



錯綜する石組溝 (南から 第8次調査)



具注暦木簡 (第15次調査出土)